

あれから1か月以上が経った。日本代表がドイツに勝ち、スペインを破り、死の組を突破し、決勝トーナメントに行くことを、いったいどのくらいの人たちが本気で考えていただろうか。極論を言えば、監督と26人の選手たち、そしてスタッフ以外は、願ってはいても、考えてはいなかったのではなかろうか。

失われた30年という言葉がある。ネガティブな言葉である。今の日本という国を象徴するような言葉である。だが、サッカーとなると、話は変わってくる。日本のサッカーは、この30年で想定以上に進化している。

何年前かに、Jリーグ創設に携わった初代チェアマンである川淵三郎氏が、国際会議の舞台上で「日本は2050年までにワールドカップで優勝します」と言い放った。嘲笑の対象になるかと思いきや拍手がわき起こった。そして、2022年ワールドカップで日本代表が成し遂げた偉業により、川淵氏の言葉は、決して夢物語ではなく、現実味を帯びたものとなってきた。

日本代表が切り開いた新たな歴史の立役者は、もちろん選手であるが、何と云っても森安一監督の存在が大きい。ワールドカップアジア予選で負ければ、非難が殺到し、監督解任の話が出る。ワールドカップでドイツに勝てば称賛され、コスタリカに負ければ、また批判される。そして、スペインに勝ち、クロアチア戦ではPKまで行き、ようやくこの監督の評価は落ち着いた。

中には、ずいぶんと日本代表に冷たいと思う人も多いことだろう。だが、他国であれば、もっと厳しい状況に追い込まれる。今回のワールドカップには、強豪国の一つであり優勝経験もあるイタリアが出ていない。ヨーロッパ予選での敗退が決まったときには、国中がお通夜のようになったはずである。そして、その後は、テレビで延々と反省会が繰り返される。

街中で男性同士がよくしゃべっているが、話題はたいていサッカーと政治の話である。ああでもない、こうでもない、ずっとしゃべっている。街中が妙に静かな日がある。イタリア代表の試合があるときである。みんなテレビを見ている。すると、急に街中から一斉に歓声があがるときある。イタリア代表がゴールを決めたのである。

イタリア代表とレアルマドリードの試合を見たことがあった。うまいのはもちろんだが、攻守の切りかえがすごかった。守っているのだが、ボールを奪ったかと思うと、スイッチが入ったようにギアを上げて攻めていく。ジダンの足にはボールが吸い付いているように見えた。

その後、日本代表の試合を見た。動きがスローモーションに見えた。愕然とする差だった。昼間に高校野球を見て、夜にプロ野球を見たときに似ていた。これは何年経っても勝てるわけがないと思知らされた記憶がある。

それが、この20年ほどで劇的に状況は変わった。その要因として、日本の選手がヨーロッパでどんどん活躍していることが挙げられる。ドイツの選手やスペインの選手を相手にすることは、今の日本代表選手にとっては、日常のことなのだろう。何も特別なことはない。

また、サッカーのフィールドプレーヤーは11人だが、今の日本代表は、選手を交代しても戦力が落ちない。逆に交代した選手が結果を出す。これは、今までにはなかった。代表選手の層が厚くなっている。AチームもBチームもそれほどの差がない。それだけ競争が激しいということである。

日本のサッカーは、これからも進化していくだろう。今回は、ベスト8という新しい景色が見られる一歩手前までは来た。そして、応援するサポーターだけでなく、日本国民全体が、いよいよ世界の強豪国に肩を並べる心構えをする必要があることを教えてくれた。

4年後には、きっと私たちに新しい景色を見せてくれるような気がする。そんなことを期待させる日本代表の活躍だった。サッカー日本代表、ブラボー！